

Close Up!

ジャイカの
あしあと

36

[セネガル]

給食を食べられる喜び

昼食を食べずに午後の授業を受けることもあったセネガルの子どもたち。それが今、給食を食べられる喜びをかみしめている。



首都から北東300キロにあるリンゲール県。40度にも

なるという昼下がりの教室をのぞくと、子どもたちが大きな皿を囲んでいる。皿にはセネガルの家庭料理チエブ・ケチャ。みんな、一口、一口、おいしさをかみしめながら食べている。この給食のおかげで、空腹のまま午後の授業を受けずに済み、集中力も高まった。

給食がなかったころは、家に帰って昼食を食べるのが一般的だった。しかし遊牧民の多いこの地域には、学校と家が離れているために、昼食を取らずに授業を受ける子どもも少なくなかった。

そうした状況から、セネガル政府が学校への食料支援を開始し、給食が始まった。とはいえ、教員たちにとって給食はまるで初めてのことに。何から始めればよいか分からなかった。そこでJICAが学校給食運営のための組織づくりに協力。また、円滑に運営していくために、青年海外協力隊がサポートしている。

隊員の一人、山路加余子さんは、給食の「継続」を目的に活動を行っている。というのも、政府

から送られた食料が学期の途中で底を尽いてしまうからだ。「一人当たりの適量を調べる実験や、計量になじみの薄い村人でも使用できる計量器具の考案などを行いました」。

実は山路さんは、最近まで本当に給食が必要なのか、疑問を持っていた。「遠方の子どもたちはどの学校でも少数派なので、給食が食べられるメリットより、給食を運営する教員や住民の負担のほうが大きいのではないかと思っただけです」。しかしその疑問は、ある村人の一言によって払拭された。

「本当に貧しくて1日2食しか用意できない家庭もあるし、家によっては昼食時間が遅過ぎて食べないまま学校に戻る子もいるんだよ」。

子どもたちが安心して学習できる環境づくりに給食が大きく貢献していることを、理論ではなく現場の声から知ったという山路さん。栄養指導や衛生教育など、給食を入りに、活動の幅を広げたいと意欲を燃やしている。

